
シークレット・ラブ

桜桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シークレット・ラブ

【Nコード】

N6859Y

【作者名】

桜桃

【あらすじ】

米花中学校に通う、栗山舞優は小6の時、

ある事がきっかけで密かに新一に思いを寄せる。

しかし、舞優の親友、倉科由美子もバス停で見かけた新一に、思いを寄せていた。

自分の恋心をしまいこんで、親友の恋を応援することに。時が流れて、高校入学。

新一と同じ高校だったことに喜ぶ舞優と由美子だったが、想像していなかった出来事が待ち構えていた。

Secret 1

誰にも言えない秘密の恋。

長年、自分の心の中にずっと閉じ込めていた。

小6の夏・・・・・・・・ある事がきっかけで芽生えた恋心・・・・。

私の好きな人は

帝丹中学に通う

『工藤新一』君。

名前しか知らない。

私は栗山舞優。
くりやま まゆ

米花中学3年生。

受験の真っ只中。

「聞いて、舞優！」

「昨日のサッカーの試合に工藤君が居たの！」

「え？」

「サッカー部だったんだ、知らなかったあ。」

「この子は私の親友、倉科由美子。」

「彼女も私と同じ・・・」

「工藤君が好きだった。」

Secret 1 (後書き)

短いですが、記念すべき第一話！です。
新連載いたしました・・・

最初のほうは、新一を見かけたり・・・
するような話しが中心なので
あまり新一と蘭が出てきたりしません。
中盤あたり・・・

高校入学してから、波乱万丈な毎日を繰り広げる予定でございます。
未永く、宜しくお願いします

私は比較的、大人しいほうだ。

肩に付かないほどの長さの黒髪。

特別手入れをしてないせいか、固い。

その点、由美子は可愛い天然パーマ。

鎖骨まである髪をゆるく2つ結びにしている。

どうして、ここにまで達したんだろう。

「聞いて！舞優！」

「今度はどうしたの？」

「バス停でね、また見かけたの！工藤君を。」

「へえ。」

由美子が工藤君を見たのは約一ヶ月前。

バスの中で出会ったらしい。

一目ぼれってやつ……。

隣に居た友達らしき人が「工藤！」って呼んでいた事で

名前が『工藤』ってことがわかったとのこと。

由美子の思い人が私と同じ人だなんて

しばらくしらなかった。

「工藤……なんていうんだろう。」

下の名前が気になるよね。

サッカー部の試合の応援してたとき、
相手中学に工藤君が居たからサッカー部だってことは確か・・・
そして、帝丹中だってことも！」

「うんうん。」

「どこの高校に行くんだろう。」

頭が良かったら、東都高校だよねえ。」

「帝丹中なら・・・帝丹高校っていう場合もあるよ?。」

「ええ!? 帝丹高校?」

私、絶対無理! いけないよお。」

「そんなことないよ、頑張れば大丈夫だって。」

「舞優は頭良いから・・・。」

はーあ、人生って上手くいかないもんねえ。」

「由美子・・・」

私はそれ以上、由美子に言葉をかけられなかった。

ドキンッ

由美子が見かけた、というバス停に
興味本位で行ってみた。

「工藤……くん。」

彼が居た。

3年前よりもはるかに大きくなっている。

当たり前か……。

でも、すごく……大人っぽくなってる。

胸の高鳴りがやまない。

バスに乗り込む。

通路を挟んで工藤君は座っていた。

ちらつと盗み見てみる。

疲れたのか、うとうとと工藤君は目を開けたり閉めたり……。

「クスツ可愛いな……」

由美子の思い人だと知ったときから

しまいこんでいた恋心が今、もう一度よみがえってくる。

ドキンッ

ドキンッ

ドキンッ

苦しいくらいに胸が高鳴る。

ねえ、工藤君・・・

貴方はあの日のことを・・・

私のことを、覚えていますか？

S e c r e t 2 (後書き)

思わぬ再会!!

ですね。

S e c r e t 3

私たちの出会いは小学校6年生の夏頃。

修学旅行のとき。

同じ宿泊先だったのを覚えている。

「あー、気持ちよかったね。」

「うんうん!」

「温泉って広いから好きっ」

「でたよー亜澄の広いもの好き!」

「いいじゃない!」

なんてバカ騒ぎをやっていた。

修学旅行一日目が間もなく終了する。

ドキンッ

一目、見た瞬間に胸が高鳴ったことを今でも覚えている。

「なあ、工藤。おごってくれ！」

「やだね。」

生徒同士の金の貸し借りは駄目だって
さっき言ってただろ？」

「んだよ、イキナリ真面目になりやがって。」

「不真面目よりはいいだろ。」

「安達、諦める。」

「工藤はこつこつ奴だ。」

「へいへい。」

「舞優？」

「あ、ごめん、今行く!」

しばらく、胸の鼓動が止まらなかった。

「えー、では……これから自由行動となります。

くれぐれも一般の方に迷惑がかからないよう、十分注意を払って
ください。

いいですか？」

「はい。」

「では、解散！」

先生の合図と共に口々に話し合う。

「ねえ、最初はココでしょ〜?」

「そうそう!」

「迷いやすいからちゃんと行動とらなきゃね!
とくに、由美子は。」

「え〜?私い?」

「あんだ、すぐどっか行っちゃうんだもん。」

「えへへ。」

「まずは・・・このバス停へ行かなきゃね。」

地図を見て確認。

いよいよ、自由行動が始まる。

S e c r e t 3 (後書き)

まだ、過去編が続きます。

「あと15分で来るみたい。」

「そっかあ。」

「でも、よかったね。」

「このバス停、ベンチが着いてるから楽チン。」

「ほんとだねー。」

「あ、ねえ ちょっとトイレ行って来るね。」

「わかった。」

「早めに帰って来るんだよ?」

「うん。」

私は早々と済ませて、小走りでバス停へと向かった。

「お〜れ〜は強い〜
力だけは・・・誰にも負けないいいい！」

私が橋を渡ろうとするとき、

向かいからまだ昼だというのに酔っ払ったおじさんがやってきた。

運が悪く、私とおじさん以外に人が居なかった。

出来るだけ近寄りたくなかった私は、できるだけ端っこを歩く。

「へろへろおん〜。」

ゆるめくおじさんの足。

「キヤッ」

ドーンと私にぶつかってきた。

その後は

もう、スローモーションとしか

言いようがない。

”落ちる・・・!”

心の中で叫んだ。

相変わらずおじさんは酔っ払ってて

私に気づきもしてなかった。

ガシッ

「おい、大丈夫か!？」

「・・・え？」

ふいに誰かに腕を掴まれた。

知らない、男の子。

「今、引くからじっとしてろよ。」

「う、うん。」

ストンッ

「あり……がとつ。」

「よかった……」

「向こうから落ちるのが見えて全力疾走。」

よっぽど遠くから走ってきたのか

男の子は汗だくだった。

「修学旅行？」

「うん。そっちなも？」

「ああ。」

「あの・・・助けてくれて本当にありがとう。
もう、駄目だって思ったから・・・」

「そっか。」

すると、同じ班らしき女の子が叫ぶ声が聞こえてきた。

「新一く？」

「わりい、今行く!!」

「新一……？」

「ああ……俺、帝丹小学校の工藤新一！」

「えっと、私……米花小学校の栗山舞優。」

にかつと笑う工藤君の笑顔……

つられて私も微笑み返した。

工藤……新一君。

これが私と彼の出会いだった。

S e c r e t 4 (後書き)

つてことば・・・

一応過去編終了でございます

「舞優」

「どうしたの？」

「また、工藤君？」

「ウッフ・・・実は、そうなの！」

「・・・由美子、わかりやすいもんね。」

「悪かったわねえ。」

「だって、他中の人にこんなに夢中になったの初めてなんだもん！」

「よかったね。」

「うん！」

「・・・舞優は、好きになった人とか居ないの？」

「え？」

「・・・私は・・・居ないよ。」

「ふーん。」

舞優、可愛いのに。」

「そんなこと、ないよ。」

親友に嘘ついちゃってるもん・・・

すんごく、醜いと思う。

「由美子だって、可愛いじゃない。」

「そうかなあ？」

でも、舞優のほづが可愛いと思う！..」

「ありがとう。」

「舞優、ちゃんと勉強してるの？
受験生でしょ。」

受験生……か。

いや〜な響き。

「もう、何ヶ月もないんだからね。
大丈夫？」

「ん……」

「ちゃんと話さないといけないって思ってたけど……
あなた、帝丹高校に行くんですよ？」

「うん……」

「米花女子じゃ駄目なの？」

「え？」

いまさら、何を言っただろう……

「あそこなら、寮もあるし……
看護科もあるしね。」

帝丹よりワンランク下だけど……
そんなに低い学校でもないでしょ？」

「そうだけど・・・」

「今の貴方のランクじゃ、帝丹は厳しいって言われたでしょ？
考えなおす気はないの？」

母親の言葉を聞いていると

『帝丹中なら・・・帝丹高校っていう場合もあるよ？』

自分の言葉がよみがえる。

「清纯女子学園もいいわねえ・・・

帝都実業高校も・・・

杯戸高校でもいいわねえ。」

「・・・帝丹！」

「え？」

『帝丹中なら・・・帝丹高校っていう場合もあるよ？』

また、頭の中で流れる。

私が由美子に言った言葉・・・

「頑張れば、帝丹にいけるって先生も言ってたし・・・
やっぱり、帝丹に行く！」

「・・・そう。」

「だったら、がんばなさいよ。」

「うん！」

かなり少ない確立だけど・・・

私は賭けてみたいと直感的に思った。

Secret 5 (後書き)

かなりお久しぶりな投稿となってしまうました・・・

ほんと、最近不定期で・・・

それでも頑張りたいと思ってますので、

皆様・・・見放さないください!!

「舞優く大丈夫かな、明日！」

「大丈夫！由美子、一緒に勉強したもん。
きっと大丈夫だよ。」

「だよね、そうだよね！！！」

由美子とは一緒に帝丹を目指すべく、

毎日勉強を積み重ねてきた。

明日は、試験。

私は今までの成績があつたせいか、

なんとかギリギリのセーフラインで推薦を狙えた。

なんでも、帝丹は受験してくる人数が多くても

推薦者は少ないらしい。

担任の話によると・・・テスト内容よりも面接のほうが難しいらしく

推薦で落とされた人数は星の数ほどいるとか・・・

落とされるなら、テスト！

という人が多いらしい。

私の場合、内心が良かったのが不幸中の幸い。？

ってやつ。

「頑張つて！これ、お守り。」

いつか、このお守りを持ってあの門を通ろう!」

「……うん!」

そして、最後のラストスパート……

予習をしておいた。

Secret 6 (後書き)

受験、ってやな響きですよね。

私もあと一ヶ月で受験生だ・・・。

S e c r e t 7 (前書き)

かなりハイスピードで事が進んでしまいましたが
ご了承ください

「やったあ！」

合格だよ、舞優！私、合格！！」

「やったね、由美子！！」

ほんと、あつという間に入学なんだから

ビックリしちゃうよね。

よく、お母さんとかが貴方が赤ちゃんだった頃が昨日のことのよう
だわ。

とか言うけど、まさにソレ。

小学校入学・・・とかが昨日のことのようだもん。

工藤君にあったのもね。

「舞優！私たち、B組だって。

こんなにクラスがある中、一緒になれるなんて
私たち、運命の友達なのよ！」

「ほんと、由美子ってロマンチストだよね。」

「そりゃそーよ。

女の子はいつだってロマンを求めてるんだから！」

「男のロマン？」

「そうそう・・・って私、男じゃないんだけど。」

「はは、ごめん。」

笑いながら教室へと向かった。

「しっこだね。」

「あ……。」

「どうかした？」

「工藤君、この学校か確かめるの忘れてた・・・」

「確かめるって・・・」

あの人数を確かめるの？」

「あ、やっぱり無謀だったかな。」

それに・・・同年とも限らないしね。」

いや・・・

同年ってことは、確かだよ由美子。

だって、同じ時期に同じところで修学旅行だったんだもん。

言いたいけど・・・

何で知ってるの？って言われたら・・・

私の気持ち、バレちゃうし。

やっぱり、いえないよね。

「あーん・・・どうか、同じであってほしい!!--」

「そのお守りにお願いしても無駄だよ。

それ、受験合格祈願だし。」

「わ、わかってるもん・・・」

「ぎゅっ」

ドンッ

「どうだか。」と言おうとした私の前に誰かがぶつかつた。

「いつ」

「舞優、大丈夫!!--」

「あ・・・わり、大丈夫か?」

「は、はい・・・何と・・・か・・・」

ふと顔を見上げた。

「く、工藤君!？」

S e c r e t 7 (後書き)

なんと、ぶつかったのは・・・

新一だったんですね。

「く、工藤君!？」

そう、声を出したのは由美子だった。

「え?何で俺のこと・・・」

やばい。

完璧不審がられてるわよね・・・

そりゃそうよ。

初めて会ったのに、自分の名前を知ってるなんて

不思議でたまらない。

「あ……さっき、向こう側の女子が騒いでたんですよ。それで……」

「へえ〜。」

私のとっさの言い訳に由美子は小さく手を合わせた。

「あ、ありがとう。」

優しく手を差し伸べてくれる彼にほんのり頬が染まる。

「痛いところとかねえか？」

「あ……うん。」

それだけを確認すると、もう一度謝って去っていった。

「ジー……」

「な、何よ……由美子。」

「いいなあ。」

私が先に歩けば、工藤君とぶつかって……
あの手に触れたのにい。」

「ご、ごめん……」

でも、大丈夫よ！

これからも機会があると思うし。」

「そうだね、うん！」

あのとときと変わらない彼の優しさ……

まだ、手のぬくもりが消えない。

「舞優って、栗山でしょ？」

「うん。」

「私、倉科……」

「それが……どうかした？」

「工藤君と隣になれるか、不安」

「もう、その話し？」

「だって！同じ『く』だよ？
可能性大じゃない！」

「そうだけど……」

「そっか……」

「隣の席になれるといいな……」

「ううん。」

「隣の席じゃなくてもいい。」

「同じ、班だったら……」

数秒後

チャイムと同時に工藤君が私の隣に座った。

S e c r e t 8 (後書き)

隣の席だったんですね。

「いいなあ、舞優！」

「え？」

休憩中、話しかけてきたのは由美子だった。

「隣になれてっ」

「あ……はは。」

「”ら”と”り”の違いだけなのに！」

「ま、しょうがないよ。」

「まだまだチャンスあるんだし！」

「ま……そうだけど。」

納得いかないようにぼやいた。

「それより、後ろの子には声かけた？」

「え？」

「名前・・・わかんないけど。」

茶髪でカチューシャの女の子。」

「うっん、まだ。」

「だよねー、私もまだ舞優以外話せないもん。」

確かに。

緊張してしまっ。

「はーあ。」

由美子のため息と同時に、チャイムが鳴った。

「えーっと、次は2時間つかって自己紹介。」

名前

趣味

特技

部活の希望

などなど・・・

自己紹介の内容を黒板に書いていった。

「相田祥平です！」

帝丹中から来ました。

趣味はカラオケ！特技はサッカー、部活はサッカー部希望です。
今年一年よろしく！」

と自己紹介が一通り終わると

「お前、特技サッカーって・・・」

「お前がやるとただの玉転がしだろうが！」

「う、うるせー！」

「ちょっとくらいは格好つかせるよー！」

と初っ端から笑いを飛ばしてくれた。

どんどん流れていく。

「倉科由美子です。」

米花中学校からきました。

趣味はお菓子作り、特技は絵画です。

部活は美術部に入ろうかと思ってます。

一年間、宜しくお願いします。」

ひどく、緊張しているせいか、こわばった表情。

帝丹高校に来る米花中学校出身者は少なくて

私のクラスでも私と由美子だけだった。

由美子の自己紹介では気だるそうにする工藤君の姿に少し、安心する。

だって、由美子を好きになったりしてゐるわけじゃないんだよね……

。

こんなこと考える私は最低かもしれない。

それでも、今ぐらいは許してほしい。

由美子の次は・・・工藤君。

「えつと・・・帝丹中学校からきました工藤新一です。
趣味は読書・・・特技はサッカー。
部活はサッカー部に入ろうと思ってます。
一年間よろしく。」

キリッとした口調にますます、好きになってしまっ。

そんな彼に後ろの子がボソッと

「こんな時はちゃんとするのね。」

なんて言っていた。

彼女も、帝丹中出身なんだろうか。

「栗山舞優です。」

趣味は読書、特技は油絵です。

部活は美術部に入る予定です。

一年間よろしくです。」

思い切って頭を下げると、教卓に頭をぶつけた。

ドンッ

「ま、舞優……」

「い……っ」

次の瞬間、笑いが起きる。

机へ戻る最中、「大丈夫？」と由美子が心配してくれた。

「ん、大丈夫。」と返す。

始めは興味なさそうに聞いていた私の自己紹介も

あのドジで笑ってくれて、ほんの少し心が弾んだ。

S e c r e t 9 (後書き)

さあ、いよいよ・・・何が始まるの？

「鈴木園子です！」

帝丹中学からきました。

趣味はシヨツピング、特技はテニス。

部活はテニス部に入ろうかと検討中です。

これでも鈴木財閥のご令嬢です！

一年間よろしく！」

親しみやすそうだな・・・という印象をあたえる。

お嬢様なのに、そんなこと全然感じない。

プライドが高い、嫌な人とは違う。

それから、どんどん流れていって・・・

とうとう、最後のほうになっていった。

「帝丹中学校からきました、毛利蘭です。」

たった一行言っただけなのに、わぁ・・・と皆声を出した。

顔だけじゃない、声まで可愛い彼女に圧倒された。

「趣味は音楽鑑賞・・・特技は空手です。部活は空手部に入ろうと思っています。一年間よろしくお願いします。」

今度は「え？」という声が出てくる。

彼女は可愛いのに、飾らない性格らしい。

普通、ブリッコして文科系の部活を選んだりする。

空手だって、空手……。

すごいなあ。

「やだなあ、あの子。」

「え？」

「毛利蘭って子。」

「私、あんまり好きじゃないなあ。」

「何で？」

「いい子そつじじゃない？」

「きつと、空手とか言つて

こわい。って魂胆だよ。」

「由美子、考えすぎだよ。」

「だつて……」

由美子が面白くなさそうに呟くと

目の前に絆創膏が差し出された。

「え……？」

「あ……さっきぶつけた衝撃か、頭から血……出てるから。」

「え！？嘘っ」

額を触つてみると確かに、少し出ていた。

「ありがとう。」

「どういたしまして。」

「さっきは思いっきりだったもんね。」

絆創膏を差し出してくれたのは毛利……さんだった。

その後ろからニシシと笑う鈴木さん。

「大丈夫だった？」

「うん。」

「私もよくやっちゃうんだよね。」

「蘭も結構ドジだから。」

「どーせドジですよーだ。」

「膨れない、膨れない。」

面白そうに笑う。

「ほら、全然悪い人に見えないよ？」

「そうかなあ？」

由美子はまだ、ブリッコだとか思ってるらしい。

「でも、ほんとドジって命取りだから気をつけたほうがいいよ?」

「い、命!?!」

「だって私、この間階段の一番上から抜けて落ちそうになったもん。あれ、落ちて当たりどころが悪かったらきつと死んでたと思う。」

「ま、蘭の場合、蘭専用のスーパーマンが助けてくれたからね?」

「す、スーパーマンってね・・・」

「あれ?違った?」

「ああ!旦那の間違いか。」

「そついう問題じゃないわよ!?!」

顔を真っ赤にさせる。

「もしかして、毛利さんの彼氏?」

「彼氏っていつか、もう旦那に近いわよね。」

「だから、旦那じゃないって！」

「あ、彼氏でもないから、信じないで！」

「え、あ……うん。」

「でも……ほんと毛利さんと鈴木さん、仲良いね。」

「そうかな？」

「ま、私たちの仲はこんなもんじゃないけどね！」

「あ……私たちのこと、さん付けしなくていいよ？」

「蘭でかまわないから。」

「勿論、私も園子で呼んで。」

「じゃあ……私は舞優で。」

「舞優ちゃん。」

「この子は倉科由美子。」

「よろしく。」

まだ心を開いてないのか、そっけない態度の由美子。

「ちょっと、由美子？」

「だって、信用できないし。」

「つたく・・・」

あ、気にしないで？

由美子、ちょっと体調悪いみたいで。」

「あ、そうなんだ。」

「だったら保健室行く？」

「・・・」

「ほ、ほんと、しめんね。」

由美子を庇うのに必死だった。

Secret 10 (後書き)

さあ、舞優ちゃん。

君の地獄はまだまだこれからです。

「それより、蘭ちゃんと園子ちゃんって帝丹中出身だったよね。」

思わぬところで由美子が口を開いた。

「工藤君のこと、知ってる？」

「うん。」

「知ってるも何も・・・」

園子ちゃんがそう言いかけたとき

「俺がどうかしたか？」

と声がする。

さっきまで寝ていた工藤君が声を出したよう。

「え……あの……」

急な工藤君登場に由美子は困ったように声をだす。

「えっと……工藤君を好きな子が居たの！
前の同級生で。」

工藤君をバス停で知り合ったとかで。」

「へえ。」

「そんな物好きもいるのね。」

「物好きってなあ……」

「ま、あんた外面はいいもんね？」

園子ちゃんは食ってかかる。

「それで、工藤君ってどんな人か詳しく知りたいって言い出して。」

「そうだったんだ。」

「まあ、その子に伝えなよ。」

好きになっても無駄だから諦めなさいってさ。」

「え？」

「な、なんで・・・？」

「だって、新一くんは蘭に夢中だもん。」

「「む、夢中じゃねえ　ないわよ　！！」「」

なにが、なんだか・・・

さっぱり状況がつかめない。

えっと・・・2人は付き合ってるの？

ኢትዮጵያ

S e c r e t 1 1 (後書き)

ちょっと、今回はみじかめでしたけど・・・

すみません!!

「あのね、2人とも。」

私とこいつはただの幼馴染!!」

「とかなんとか言っつて、相思相愛。」

「だから、違っつっつてんだろ!？」

「だって、新一くんっつてば蘭をいつだっつて片時も話さないじゃない!
特に小学校の修学旅行なんかさあ。」

91

小学校の修学旅行?

っつて・・・私が、初めて工藤君と出会った時。

「雷が激しくて眠れなかった蘭を連れ出して
ロビーで2人で寝てたじゃない?」

「え!？」

「な、何でオメーが知ってんだよ！」

「そうだよ、あのときは皆起きる前に部屋に戻ったのに！」

「そうそう。」

朝早く部屋に戻ってくる時、私起きてたのよね。実は、それで怪しいな。って思ってたよ。

担任の先生を乗せたらゲロツたわよ。」

「案外簡単だったわ。」と園子は呟く。

当の2人は顔を真っ赤にさせた。

由美子は面白くない、といった顔をしてる。

「中学校のときなんか、大人になった分すごかったわよね。特にい……」

「もうやめて……!!!」

「あれでも、舞優はいい子だっていうの？」

「……言つよ。」

だって、由美子の気持ち知らないんだよ？
気を使つはずないでしょ。」

「……」

「蘭ちゃんはいいい子だよ。」

計算なんてできないよ……」

「でも、やっぱり好きになれない。」

由美子の気持ちも十分わかる。

あんなに子供っぽい工藤君を見たことがなかった。

しかも、蘭ちゃんが「新一」って呼ぶ。

このことはやっぱり、衝撃的だった。

……まあ、幼馴染だからしょうがないって言えばしょうがないんだけど……。

Secret 12 (後書き)

さて・・・やっと、高校生編へと突入です!!

「おはよー。」

「おはよう。」

2人は、ただの幼馴染とは違うと思う。

だって、普通だったら一緒に登下校なんてしないもん。

「お、おはよ、工藤君。」

「……はよ。」

思い切って挨拶する今日この頃。

ほんとは他の部活の人を待つちゃいけないんだけど

どちらかが早く終わった場合、こっそり相手を待ってること・・・
私は知っている。

「今日、数学の宿題あったの、覚えてる？」

「えー!？」

「蘭ちゃん、忘れたの？」

「うん。どうしよう・・・」

私、数学苦手なのに・・・それに、今日当てられる・・・。」

「終わったね、蘭。」

「園子、お願い!今日だけ見せて!..!」

「いいけど・・・あってる自信、ないよ?」

冷や汗かきながら園子ちゃんは言う。

「ほら、宿題ならもっと適役いるじゃない。

新一君に見せてもらいなよ。

やってあるんでしょ？」

「いや・・・俺も忘れててやってねえ。」

「・・・たく、何やってんのよ。夫婦そろって。」

当たり前のように呟く園子ちゃんに工藤君はじと目で見る。

いつもなら反論する蘭ちゃんも今はそれどころではなそう。

「ごうじよ・・・舞優ちゃん、やった？」

「うん・・・でも、園子ちゃん同様、あってる自信が・・・」

と言ったとき、私の目の前にノートが差し出される。

そのノートは蘭ちゃんの手元へ……。

「これ写しとけ。」

「え？でも、やってないんじゃない……」

「今やった。」

「はやっ！」

あんた、今回の宿題丸々1ページあったじゃない！」

「あんな簡単な問題1分あればできる。」

「うわー、何その余裕！」

すごいムカつくんだけど。」

園子ちゃんがすごんだとき、蘭ちゃんがみるみる笑顔になったのがわかった。

「ありがとうー！ありがとう、新一ー！ー！」

「え？あ、あぁ……」

「今度、お礼するから、絶対。」

こんなに感謝されるなんて・・・と思ってるにちがいない。

「新一、明日確か部活休みだったよね。」

「ああ。」

「だったら、朝昼夜、ご飯つくってあげる!」

「マジ?」

「うん!!お礼だもん。」

「よかったー・・・久々にレトルトから抜け出せる。」

蘭ちゃん、工藤君の家に行くんだ。

まあ、幼馴染なら当たり前なんだけど・・・

でも、やっぱり・・・

辛いよね。

S e c r e t 1 3 (後書き)

次回も宜しくお願いします!!

冬って・・・寒いけど空って綺麗なんだな・・・

って呆然と考える。

空気なんか澄んでいて・・・

なんか、排気ガスとかいろいろ考えないで

田舎のように空気がきれいなんじゃないかな。

って思う。

「舞優ちゃん、ごめんね。

これからパパとデートなの」

「あ・・・そう。」

パパはサラリーマンでよく仕事仕事……って言いながら

残業、残業……で早く帰ってくる日が珍しいくらい。

日曜日は接待だとか言っていてゴルフいたりして

中々家に居ない日々。

明るくて照れ屋なパパがママとデートだって。

映画に行くんだとか。

「楽しんできてね。」

久しぶりだもんね、2人でデートだなんて。」

「でしょ〜。」

だから昨日、急いでワンピース買ったの。

どう？似合うかな。

本当は舞優ちゃんに服借りようかなって思ってたんだけど……

やっぱ、買ったかった。」

「うん、似合ってるよ。」

私の着るより数倍良かったんじゃない？」

「そうかな？」

クルクルの巻き毛をいつもはおろしてるのに

今日は二つに縛っていた。

「あ、パパが呼んでる。」

「じゃあ、行ってきます。」

「行ってらっしゃい！ー！」

一人ぼっち。

今頃・・・工藤君と蘭ちゃんは・・・

考えるだけで心が強く締め付けられる。

恋心ってこんなに辛いんだね。

今まではただ、憧れてただ恋を楽しんで・・・

由美子に嘘をつくのは辛かったけど・・・

蘭ちゃんと一緒にいるところを見るほうが数倍辛い。

キ
|
コ
|

キ
|
コ
|

ブランコをこぐ。

一人で家にいるなんて、むなしかった。

公園になんとなく、きてみた。

ただ、なんとなく。

「あれ？舞優ちゃん？」

「ら、蘭ちゃん……」

「どうしたの？」

「え？」

あ……今日、両親居なくて……
だから、お昼ご飯食べに行くついでにここに寄ったの。」

「ってことは、お昼ごはん……まだなの？」

「うん。」

「うーん……ちょっと待ってて。」

携帯を持ってなかったのか公衆電話へ走りだした。

「お待たせ！
ちよつと新一に電話かけてたの。」

ズキン

「そうなんだ・・・」

「ねえ、舞優ちゃん。」

「なに？」

「新一の家でお昼ご飯、一緒に食べない？」

「え？い、いいの？」

「うん！」

さつき新一に確認とつたら良いつて！」

「でも・・・やっぱりいいよ。」

「え？何で？」

蘭ちゃんは目を真ん丸くさせた。

「だって、邪魔したら悪いもん。」

元々最初は2人での約束だったんだし。」

「気にしないで？」

料理なんて何人分つくろつが同じことだから！」

「……じゃあ、お言葉に甘えさせていただきます。」

ウキウキしながら歩く蘭ちゃんを何回かチラ見しながら

由美子がこのことじったらどんな風に反応するだろう。

そんなことを考えてきた。

「ここが新一の家よ。」

「え!?!ここ、ここが?」

「うん。みんなそう言う。」

クスクスとよほど面白かったのか・・・

蘭ちゃんは笑いながら門を開けた。

なんで、この人はこんなに簡単に門を開けられるんだろう。

私だったら、こんなことできない。

・・・その前に、私にはそんなことする理由も、権限も・・・資格もないんだけどね。

蘭ちゃんは幼馴染だから、幼馴染だから。

工藤君に一番近い人だから・・・

できるんだよね。

「蘭ちゃんって、工藤君にかなり近い存在だね。」

「え？」

「だって、こんな風に家にこれるって
相当なもんでしょ？」

「ええ？だって、幼馴染だし・・・。」

「幼馴染って、一番近い距離だと思うな。」

そう言う私に向かって一瞬、蘭ちゃんは悲しそうに笑った。

「そうかな？」

「案外、一番遠い位置にいるかもだよ、私……。」

「え？」

「じゃ、入ろうか。」

カチャ

大きなドアを開けた。

S e c r e t 1 5 (後書き)

次回も宜しくです!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6859y/>

シークレット・ラブ

2011年12月11日08時50分発行